
東方怪獣王

YS - 86

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方怪獣王

【Nコード】

N8538Z

【作者名】

YS - 86

【あらすじ】

かつて、一体の不死身の「核の落とし子」がいた。人間を激しく憎み、数多くの破壊と殺戮、激闘を繰り返した”彼は遂には『永久の幸せ』を得る事が出来ずに東京を死の街へと変えながら『死』んだ。しかし、”彼”が次に目を覚ました時、そこに広がっていたのは死後の世界ではなく、幻想渦巻く世界だったのである。

0・核の落とし子（前書き）

この作品は、上海アリス幻樂團さんの作品「東方Project」の二次創作となります。あの世界的にも有名な”彼”の姿を変えての（俗に言う転生系なのかな？）幻想入りモノとなります。ちなみに主人公最強、かつハーレム（理由は彼の幸せを願って）を目指しています。それが嫌な方はブラウザバックでお戻り下さい。尚、私の東方知識はwiki頼りとなっているので（さらに生意気な事に独自設定・解釈付き）、至らない点もあるかと思いますがこんな駄文に付き合っ頂けるならば嬉しい限りです。では、プロローグ、始めます。

0・核の落とし子

1954年

俺は総てを奪われた。俺にとって大切な仲間達と『俺』という”存在”を理不尽に、この星の支配者を気取っている『ヤツら』の身勝手さによって……。

事の始まりは、ビキニ環礁で起きた核と呼ばれる兵器とやらの実験だった。

俺と一族同胞達ゴジラザウルスは当時、南海の小さな孤島・ラゴス島で眠っていた

……。

突如、すぐ近くの海で物凄い音が聞こえた為、飛び起きると、俺達は閃光に包まれた。

結果、その実験によつて、俺以外の一族同胞総てが死に絶え、俺は『ヤツら』の言う『恐竜』としての”これまでの自分”が死に、真正銘の『怪物』となつてしまった。

全長五メートルもある『怪物』に……。

俺は思った。

何故、俺がこんな目に合わなければならぬんだ！俺はただ、平穩に暮らしていたかっただけなのに！！と。

最初の内は、絶望が心を支配するだけだったのが、やがてどす黒い復讐心に捕らわれていった。

俺の平穩な生活と折角”あの時代”から生き延びた命を奪い去った挙げ句、俺達が住んでいた島を跡形もなく消し飛ばした『ヤツら』を決して許さないという気持ちに……。

そう思った俺は仄暗い海の底から這い上がってきた。

『ヤツら』『ー』『ニンゲン』に復讐する為に。

俺から総てを奪ったこの世界を壊す為に。

まず手始めに俺は目の前をあつた漁船とやらを次々と沈没させた。

だが、こんなモノは序の口だ。

次に俺は近くの島に上陸し、破壊と殺しの限りを尽くした。

多くの命が消えたのは、分かっている。そして、多くの者が悲しんだ事も……。

だが、それがどうした！

俺の苦しみは、哀しみは、痛みは、絶望は、こんなモンじゃなかった。

もっと味合わせやる。さらなる絶望を！

そう思った俺は、『日本』という島国に上陸し、破壊し尽くした。

『ヤツら』が作った街並みを！命を！総てだ！

泣き喚け！足掻け！苦しめ！もがけ！そして、燃え尽きて灰になれ！！

俺の憎悪の声は『ヤツら』の住む街の一つ、『東京』とやらに響き渡った。

暫くそういった復讐という名の破壊をしていた、ある日の事……。丁度その時、俺は海底で休んでいた。

自分の身に迫る危機に気付かず……。今、思えば完全に油断していた。

こんな海の底までは『ヤツら』も来る事など出来ないだろう、と。それがいけなかった。

やがて俺は異変に気付く。

俺の体が溶解し始めたのだ。

『オキシジェン・デストロイヤー』。

それは俺をこんな体に変えた『核』を上回る悪魔の兵器。

それによって俺は一度目の『死』を迎えた。

全身を白骨と化して……。

だが、俺は生きていた。

白骨と化しても、強靱な心臓だけは残っていたのだ。

その心臓だけの状態で、俺は己の身勝手で、この俺を生み出してお

きながら、またもや自分の身勝手さで俺を殺した『ヤツら』への憎

悪の念を益々募らせながらひとまずは眠った。

再び肉体を手に入れ、破壊の限りを尽くす為に……。

そして、三年の月日が流れた……。

1985年

その日は俺が最初に破壊と殺しの限りを尽くした時から、丁度三年の月日が流れていた。

大黒島の噴火が原因となつて俺は目覚めた。それも以前とは比べ物にならない程の体躯（全長八メートル。以前の三メートル程高くなっていた）と『力』を持つて……。

俺は再び暴れ回った。復讐を果たす為に……。

途中でカドミウムで体の動きを抑制されたが、『ヤツら』が俺に誤つて撃ち込んだ核ミサイルによつて、それが解消された。

だが、俺の復讐劇もまたあっけなく終わる事になる。

今思えば、誘導されていたのだらう……。

三原山の火口まで特殊な音波でそこまで引き付けられたら後、足元を人工的に爆破され、俺は火口へ転落していった。

マグマに足を着けた時は何でもなかったのだが、直後の火山の爆発

による衝撃で気を失ってしまった。

その数年後、『ヤツら』の中の一部が間抜けにも火口を爆破した為、俺は二度目の眠りから覚めた。

それから、俺は、植物と動物の融合生物『ビオランテ』、三体の生物が『核』の力によって融合し誕生した『キングギドラ』（途中で自身の存在を消されそうになったが「これが結果的に俺の二度目の『死』となった」、様々の事が起きて復活。それと同時に一度存在を消された事によって忘れていた過去の記憶を一気に取り戻せた）、太古から存在した地球の守護神『モスラ』や破壊神『バトラ』といった俺と同じような存在と交戦した。

戦った理由は簡単だ。俺の邪魔をしたからだ。

しかし、『モスラ』は、『モスラ』だけは、この俺に復讐の無意味さを必死になって説得してきた。

だが、俺はこう答えた。

五月蠅い黙れ！お前らに何が分かる！

復讐は無意味だと！？

それが、何だ！復讐は無意味だから何だと言っただ！

俺は総てを『ヤツら』に奪われたんだぞ！

『ヤツら』から俺が奪われたモノを奪って何が悪い！！

説得が無理、と判断したアイツは敵対していたはずの『バトラ』と共に、この俺を封印する事にした。

当時は何故あのような事をしたのか理解できなかったが、今思えば、俺の幸せを思つての行動だったのだ、と理解できる。

俺が封印され、暫く経ったある日の事。

遠くにひどく懐かしく、そして他人とは思えない微かな気配を感じていた。

俺は『モスラ』の封印を破り、その気配のする方向へと向かった。気配のする”アドノア島”に行くと、そこには卵が置かれていた。俺はその時思った。

ああ、俺は独りじゃなかったんだな。良かった。良かった。お前も独りじゃないぞ。これからは俺が護ってやるから安心しろ、と。

卵を護ろうと側へ近付こうとした時、突如邪魔が入った。

『ラドン』という俺と同じような存在だ。

奴は俺を敵と見なし攻撃してきた為（当時は分からなかったが、アイツもあの卵を仲間・同胞と認識していたのだと後に分かった）、俺は返り討ちにした。

これで邪魔者はいない、と思ったのも束の間だった。

今度は『ヤツら』が同胞の卵を持って行ってしまったのだ。

俺は怒りを感じた。

俺から総てを奪っておきながら、今度は俺にとって最後の希望かもしれないモノを、俺の仲間を奪おうというのか！と。

俺は卵を必死で追いかけた。

途中で、俺にソックリの機械とやらで造られた兵器（後に『メカゴジラ』という名称である事が分かった）が俺の前に立ち塞がったが、力でねじ伏せた。

その後、孵化した『ベビー』の気配を頼りにある施設へ向かったが、『ベビー』に説得され、俺は一旦は引き返す事にした。

その後、俺は再び『ベビー』の気配を追って、幕張とやらにやって来た（そこには既に『ラドン』が倒れていた）所をまた『メカゴジラ』に邪魔をされた。

何故、俺の邪魔をする！

俺は、ただ自分の同胞を連れ帰りに来たただけだ！！

声を大にして叫んだ所で、所詮『ヤツら』に届くはずもない。『ヤツら』の乗る兵器『メカゴジラ』が俺に襲いかかる。

奴は以前戦った時よりも断然パワーアップを果たしていた。俺の『力』が殆ど通用しなかったのだ。

そして、『メカゴジラ』は遂に俺の”第二の脳”を破壊した。

あの時は、俺ももう駄目かと思った。『ヤツら』への復讐も志し半ばで俺はここで死ぬのか、『ヤツら』に捕らわれた『ベビー』に会えずにここでくたばるのか、と

だが、かつて”アドノア島”で戦った『ラドン』が俺を救出しに来てくれた。

自分も瀕死の重傷だと云うのに……。

倒れる俺にアイツは自分の想いを告白し、そしてそれを俺に託して逝った。俺にアイツ自身に残された最期の『力』を与えて……。

俺はその想いに応えた。

アイツが俺にくれた、この『力』をあつ俺の邪魔をしてきた憎き『ヤツら』の虎の子の兵器・『メカゴジラ』に叩き付け、見事に撃破した。

その後、俺は『ベビー』と共に”バース島”へ向かった。

そこで共に暮らす為に。

俺が『ベビー』と生活し始めてからは、まるで、『あの頃』に戻ったかのような穏やかな気持ちになっていた。

それは、『ベビー』から聞かされていた事にも原因があるのだと思う。

『ベビー』が日本にいた頃、かつての俺からは信じられない事に、非常に優しく温かく愛情を持って育ててもらった、という衝撃の事

実だった。

最初は信じられなかったが、『あの子』の目を見ていたら、それが真実であった事を知った。

それを知って以降、『ヤツら』の中にも捨てたモンじゃない者も結構居るのだな、と思わず見直してしまったのだ。

おそらく、それからだろう。俺の中にあつた『ヤツら』への憎悪の念が急速に薄まっていったのは……。

お前の復讐心はその程度で消えるモノだったのか？と思われるかもしれない。

自分でも内心戸惑いながらもそう思っていた。

俺は暫くの間、深く思い悩んだ。

俺は『ヤツら』を激しく憎んでいたではないか。

それが何故仲間を見つけ、その仲間が温かく迎え入れられただけで、こんな”穏やかな気持ち”になつてしまうのか、と。

しかし、そんな状態でも、不思議と悪い気は起きなかった。むしろ居心地が良かった。

俺は確かに『幸せ』を感じていたのだ。

その時になつて『モスラ』の行った行動と”彼女”の真意が漸く理解できた気がした。

だが、もう俺は今までの事から『ヤツら』と相容れる事など出来やしないと思つていた。

いかに穏やかな気持ちになつても、その”想い”だけは何年経つても変わる事はないだろう。

それでも、願わくば、『ベビー』だけでも『ニンゲン』と共存していつて欲しいとも感じていた。

『ベビー』が『リトル』へ成長し、暫くは平穏で平和な生活をしていた時に、突如”それ”を崩す出来事が起きた。

この星――地球の外に広がる空間・宇宙から俺の闇の分身とも言うべき『奴』が襲来してきたのだ。

襲撃してきた『奴』はまさに、『過去の俺』そのものだった。

この世界にある、ありとあらゆるモノを破壊し尽くそうとする所が、明らかに『リトル』に会う前の俺にソックリだった。

『奴』との最初の戦いは、俺達が住んでいる”バース島”で行われた。

俺は戦ったものの、『奴』の圧倒的な戦闘力の前では手も足も出なかった。

完敗だった。

挙げ句の果てには、奴は奴の力で創り出した結晶で『リトル』を”バース島”ごと閉じ込めてしまったのだ。

俺は無力感到苛まれた。

俺にもつと力があつたら、『リトル』を危険な目に合わせなかつたというのに……。

だが、こんな所で立ち止まってなんかいられなかつた。こうしている間にも結晶に閉じ込められた『リトル』の生命力は時間と共に磨り減ってしまっている。

この結晶は『奴』の手によって創り出された。という事は、『奴』を倒せば消滅するという事。

こうして俺は『リトル』を救う為、そしてかつての『俺』を倒す為に島を出た。

必ず帰る、という決意を込めて……。

やがて結晶に包まれた日本の福岡に乗り込んだ俺は、『ニンゲン』が新たに造ったモグラもどきと共に（非常に不本意だったが、『リトル』を救う為と割り切った）、苦戦しながらも、何とか撃破する事に成功した。

これによって、『リトル』の気配も復活した為、俺は安心しながら”バース島”へ帰って行った。
協力してくれた『ニンゲン』に多少は感謝しながら……。

その後、暫くの間は、平穏な生活を『リトル』と過ごしていた俺だったが、それは突然起こった。

”バース島”が突如爆発し、消滅したのだ。
この現象には覚えがある。

これは、『あの時』と同じ現象だった。

だが、『あの時』と違う事がある。

それは『ニンゲン』が関わっていないという事だ。

単なる自然現象だという事をすぐに悟った俺は、懸命に『リトル』を捜した。

だが、あの子はどこにもいなかった。

俺達はあの爆発の所為で離れ離れになってしまったのだ。

『リトル』を捜す為、行動を開始しようとした時、漸く俺は自分の体の異常に気付いた。

体が熱いのだ。

体の内部が灼けるように熱かった。

いや、そんな生易しいモノじゃない。

まるで、体の内側がマグマになっちまったかのように錯覚する程の異常な熱さだった。

当然、いつ倒れちまうか分からない程苦しかったが、今は自分より行方の分からない『リトル』だ。

こうして、体の異常な熱に苦しみながら、俺は『リトル』捜索に乗り出した。

途中、やはり苦し過ぎて香港に上陸し、暴れてしまった。

以前の俺からは信じられない事だが、若干の罪悪感を感じながらその場を後にした。

それから暫くの後、『リトル』がいるかも知れない日本に上陸したが、やはり痛みと熱、それによる苦しみから俺はとある発電所を襲おうとしてしまった所を『ニンゲン』に止められ、事なきを得た。だが、やはり症状は重くなるばかりで（体内の熱がグングンと上昇するのが嫌でも分かった）、折角止めてもらったのに無駄になっちまった。

……まさか、俺があれほど憎んでいた『ニンゲン』にこんな感情を持つ事になるなんて思ってもいなかった。これには流石に驚いた。だが、それは些末な事。

一刻も早く、『リトル』を捜さなければ……。俺は重い足を引き擦りながら、『リトル』の気配を追った。

気配を追いかけた先には、成長した『リトル』、いや、またデカくなった上に俺にソックリだから『ジュニア』がいた。

『ジュニア』の近くにどこかで感じた事のある気配がしたが、今はどうでも良い。

やっと再会出来たんだ。

俺は嬉しさのあまり思わず笑っていたと思う。

その気配に気付かずに……。

今にして思えば、その気配の正体が、『アレ』の化身だと、この時分かっていたら、俺は油断などしなかっただろう。どうでも良いなんか思わなかっただろう。

そう、過去に一度俺を殺した、『アレ』の気配がする事に気付いていれば……。

それは再会の喜びも束の間の事だった。

デカい気配がしたと思ったら、『ソイツ』が現れたのだ。

『ソイツ』は現れるなり『ジュニア』の体をかっさらい、上空へ連れて行った。

突然の事に、俺はただ、その光景を見ている事しか出来なかった。

『ジュニア』の首の骨が折られ、地面に叩き付けられる様を……。

地面に叩き付けられ虫の息になってしまった『ジュニア』に俺は急いで駆け寄り、蘇生用の核エネルギーを与えるが、それも無駄に終わってしまう。

このままでは『ジュニア』が死んでしまう。

どうしたら良いか分からない俺に『ジュニア』は一言「ごめんね」と謝ってからとうとう事切れてしまった。

何が、「ごめん」なのか分からなかった。

折角戦う力を得たのに足手まといになってしまった事なのか、俺より先に逝ってしまう事なのか、それとも……。

俺は涙を流した。

この化け物の体になってから初めて泣いた。

『ジュニア』を失った悲しみと目の前にいながら助ける事の出来なかった自分自身が情けなくて、ただ泣いた。

悲しみはやがて、怒りとなった。

体内から発せられる自分を灼き続ける熱など、もう、どうでもよくなかった。

俺は前方を見る。

目の前に、『ジュニア』を殺した『奴』がそこにいる。

かつて、俺を殺した『アレ』の化身がすぐ目の前で、今度は俺の番だとも言つように嗤いながら立っている。

上等だ……。

貴様は……俺の大切な者を奪った貴様だけは、絶対に許さん！

今の俺の中にある総ての『力』を総動員して絶対に滅ぼす！！

俺は憎悪と怒りの声を上げながら、『奴』に向かっていった。

それから先は殆ど覚えていない。

自分の体がどれだけ傷付こうが構いやしなかった。

俺の体などどうなっても良い。俺の総てをコイツに叩き付ける！

その想いで腕を、爪を、尻尾を、牙を、そして、必殺の熱線を『奴』に容赦なくぶち込んでいく。

まるで『ジュニア』の痛みを、苦しみを『奴』に刻み込むように……。

やがて『奴』が滅び去った時、虚しさと共に自分の異変を再認識した。

何となくだが、俺の体が、この星に甚大な被害をもたらすのではないかと、というのは気が付いていた。

俺は死期を悟った。

『ニンゲン』達が俺から発せられ膨張し続けている『核』の力……を抑える為に、懸命に冷却を続けている。

自分の体が崩壊していく中、俺はそれを黙って見ていた。

今までの生涯で経験してきた事を走馬灯のように思い出しながら……。

色々な事が本当にあった。

家族や同胞を奪い、俺を『化け物』に変えた『ニンゲン』を恨み、憎み続け復讐を誓い、破壊の限りを尽くした。

そして、様々な出会いがあった。
色々な俺と同じ存在。

『ビオランテ』、『キングギドラ』、『モスラ』、『バトラ』、『ラドン』……。

みながみな命の削り合いを演じてきた数々の強敵達……。

そして、ついには護れなかった『ベビー』、いや『ジュニア』という掛け替えのない存在との出逢い。

そう言えば、この出逢いが俺の生き方を変えたんだっただな。

俺の荒んだ心が、日に日に癒されていくあの感覚。

忘れる事など出来る訳がない。

実にいい気分だった。

ふと『ニンゲン』の方を見る。

あれほどの事をしてきたのに、アイツらは俺の『完全な死』に涙を流してくれていた。

『ニンゲン』も捨てたモンじゃない。

俺は、今改めて思う。

俺の『ニンゲン』への憎しみや恨みは、死しても消える事はないだろう。

でも、これだけは言える。

これでやっと、俺は安らかに逝ける……、と。

何故か、俺を見送る『ニンゲン』達の顔を見ていたら、そう思えた。

それにしても実に不思議な気分だ……。

今の俺には、憎悪も怒りも何もない。ただ穏やかな気持ち胸に広がるだけだった。

そして、俺の意識はそんな感情を抱いたまま消えた。

こうして、一体の哀しき『龍』の物語は終焉を迎えた。

しかし、物語はこれで終わりではない。

これは、終わりにして始まり……。

この物語は、幻想渦巻く世界に、“一人”の破壊神が降臨する時、始まる。

0・核の落とし子（後書き）

次回、”彼”が「東方」世界で目覚めます。

”彼”が目覚めた時の時代は、まだ幻想郷が出来ていない遙かな昔です。

理由は簡単、いきなり本格的な幻想入りをさせると『ヤバい』事になりかねないからです。

それでは、また！

1・目覚めた先は……（前書き）

姿が変わったゴジラさんの目覚め。彼はこの世界で一体何を見るのでしょうか？

ちなみに前回に比べ短いです。

それでは、本編どうぞ。

この作品は作者の妄想イメージが過分にあります。どうか生暖かい目で見てください。

1・目覚めた先は……

ここは、今より一億数千万年前の原始の森。

この物語は総てここから始まる。

この地に、“一人”の破壊神が降臨した事によって……。

《ゴジラ 視点》

瞼の奥まぶたからでも分かる程、陽の光が強い。
呼吸をする度に肺が動くのを感じる。

それに森の木々がざわめく音が良く聞こえる。
それに最近じゃ島じゃなきや感じなくなった自然の良い匂いが鼻を
通して入ってくる。

これが、死後の世界というヤツなのか？

……。

いや、それにしてもおかしい。

俺が死んでいるならば、こうやって溶けたはずの心臓が鼓動を奏で
ているはずがない。

肺が機能するはずもないし、匂いや音を感知出来るはずもないんじ
やないのか？

そう思った俺は瞼を開ける。

「……………うっ！」

目に入ってきた急激な光に俺は思わず呻き声を洩らす。

呻き声？それも『ニンゲン』のような……………。

疑問に思ったが、そんな事はひとまず放って置く。

今は自分の状態を確かめる事が重要だ。

視界に広がっていたのは、森だった。

しかし、最近の森という感じではない。寧ろ、懐かしい感じがする。随分昔になるが、この情景には見覚えがある。

確か……………。

そうだ。まだ、『ニンゲン』達が誕生する前の太古の森だ。

そして、俺は……………、

「生きている……………？」

どういう事だ？俺は確かに死んだはずだ。『ニンゲン』の言葉で確か、『めるとだうん』と言ったか？それにより、俺の体は総て溶解して消滅したはずだ。

なのに何故……………？

考えても埒があかない。

なので、俺は上半身を起こす事にした。

……………。

妙だ。視点が低い。

俺の体なら、上半身を起こしたただけで木の天辺てっぺんが見えるはずだ。
なのに高い所に天辺がある。

何故だ？

さつきから疑問ばかりだな……。

取り敢えず、体の確認をするか。

体内の調子は『死』の直前に感じていた熱さはなく、寧ろ普段と変わ
らない。いや、いつもより調子が良いくらいだ……。

後は、体の外側か……。
まずは手を見てみ……。

「何だと………！？」

俺はつい声に出して驚いていた。

それぐらいのインパクトがあったのだ。

何故なら……。

自分の手がいつもの見慣れたゴツゴツとした手ではなく、『ニンゲ
ン』の手になっていたのだから……。

い、いや手だけではない。俺の体を見回すと完全に『ニンゲン』の
身体それだった。

黒い革で作られた上着（後に革ジャンだという事を知る）に、同質
のズボンという履き物、そして上着の下には紺色の下着（後にシャ
ツだと知る）、足には黒色の靴とやらが身に付けられている。

そして、『ニンゲン』の身体でありながら、服の内から筋肉の鎧に
覆われた強靱な肉体があるのが良く分かった。

一体、今の俺の姿はどうなっている！？

そう思い、近くにあるであろう湖（何故分かったかと言つと単純に耳が良い為水音で分かった）に行こうと立ち上がった。

だが、

「なっ！？上手く立て……！？」

ドシャアッ！

強靱な二本の足で立ったはずなのに、俺は上手く立つ事が出来ずに前のめりに転んでしまう。

「くっ……！」

腕で身を起こし四つん這いの態勢になった時、そこで漸く倒れてしまった原因に気付く。

それは、今現在の俺の状態を考えれば分かる事だった。

今の俺は『化け物』の姿ではなく『ニンゲン』の姿になっている。という事はつまり……、

「！ そうか……。尻尾がないから、平衡感覚がいつもと違うのか」
そう。尻尾がない分、『化け物』の時とは平衡感覚バランスが全く異なるのだ。

そうと分かれば、すぐに立ち上がって、この”尻尾”がない状態を慣らすしかない。

そう思った俺はそれをすぐに実行に移した。

長年生きてきた故なのか、それとも違う理由なのかは不明だが、俺は二本足だけで立つコツを、ものの数分で掴んだ。

基本コンさえ掴んでしまえば、後はその応用だ。どうにでもなる。

そう思った俺は今度こそ湖へと向かった。

俺が湖周辺に着くと、そこには思った通り、草食恐竜が水を飲む為に沢山集まっていた。彼らは俺の気配に気付き、一度は振り向くが特に警戒した様子もなく、またすぐに自分達の”日常”へと帰って行った。

俺は草食恐竜達の間を抜けて（この姿の為か、抜けるのが容易だった）、湖面を覗き込む。

そこには――、

「これが、今の俺か……」
透き通るような湖面には『ニンゲン』の姿になってしまった俺がいた。

端正な顔立ちに、険しく鋭い目つき、赤銅色の瞳、光の加減でやや緑の光沢が時々浮き出る黒い髪。
その髪はボサボサとしてはいるものの不思議と髪型として成り立っている。

そんな姿が映っていた。

「フツ……」

自然と自嘲的な笑みと声が出てしまう。

皮肉なモノだ。あれほど憎んだ『ニンゲン』と同じ”ような”姿になっちゃってしまっているとはな。

だが、昔なら嫌悪するはずのこの姿には不思議とそれは湧いてはいない。

どこか気持ちの良さも感じていた。

喉の渴きを潤し湖面を眺めながら、ふと状況確認をして分かった事

を整理する。

今、俺がいるのは、間違いなく俺が生を受けた時代だ。

何故、肉体を残さず消滅したはずの俺がこの時代で再び目を覚ましたのかは分からない。

だが、そんなモノは些細な事だろう。

俺は今、生きている。

ここに。この時代に。

それだけで十分だ。

そして、俺の体の事を考える。

この体には全く違和感がない。この感覚は正に『俺の体』そのものだ。

どうやら、姿こそ『ニンゲン』だが、中身は以前と全く変わらないようだ。

文字通り『人の皮を被った「化け物」』と云った所か……。後、確かめる事は……。

そう考えていた矢先、背後から、ズンツ！という足音が聞こえた。

さっきから近付いてくる気配がしていたモノと同一の存在だ。

草食恐竜達は既にここから避難している。

背後を目だけを動かして確認する。

「グルルルルツ……」

予想通りというかこの時代において最大の肉食恐竜が俺を喰らおうと狙っていた。

しかし、

「丁度良い……」

俺はそう思った事を呟きながら立ち上がり、

「貴様には”今”の俺の『力』を試す、練習相手になってもらおうか」
眼光を鋭くして振り向く。

「ガアアアアアアッ!!」

『奴』が咆こうと共に俺に向かって突進しながら噛み付いてくる。こうなると、まず試したくなるのが、跳躍力だな。

「甘い……」

そう呟き、俺は”軽く”跳ぶ。

奴はそのまま湖に着水し勢い余って転ぶ。

俺はその巨体（あくまでも”今”の俺から見ても）を飛び越え反対側に着地する。

どうやら、跳躍力は全く変わらないようだ。

ザバアッ!という音が背後から聞こえる。奴が起き上がったようだ。

次に試すのは腕力だな。

『奴』はいなくなった俺を数秒間捜した後、真後ろにいるのに気付く。

即座に自前の太い尻尾で薙ぎ払うように攻撃してくる。

その威力は、もし俺が本物の『ニンゲン』なら成す術もなく吹っ飛ばされ全身の骨が砕かれてしまうだろう。

だが、生憎俺は『ニンゲン』ではない。

俺は片手で奴の尻尾を難なく掴む。

止められた事に、心なしか『奴』は驚いているようだ。

ふむ、腕力も問題ないようだ。

『奴』が俺の掴んだ手を振り払おうと必死になって暴れるが、俺に

は意味がない。

寧ろ無駄な体力を消費するだけだ。

試したい事が、まだあるというのに体力切れになってもらっては意味がない。

なので、

「そんなに離れたいのなら放してやる。そら！」

片手で掴んだ尻尾ごと奴を”軽く”投げる。

すると奴は長い放物線を描きながら吹っ飛んだ。

ドズウウンツ！！という重い音が辺りに響き渡る。

さて、本当ならここで尻尾の打撃力を試したい所なのだが、”この姿”なので尻尾がない。

その為、尻尾の代用を考えていると、思い付いたのが……。

「なら、足か……」

そう。尻尾がないのなら、それに代わる足による打撃力を試せば良い。

そう考えていると内に『奴』が頭を揺らしながら、漸く起き上がる。

どうやら相当頭に来ているらしく唸り声が増わった。

そして、大口を開けて、俺を喰らおうと迫ってくる。

『奴』の口が俺を喰らおうする寸前、

「ハッ！」

掛け声と共に右回し蹴りを奴の側頭部に叩き込む（もちろん手加減はしている）。

すると、『奴』は情けない声を上げながらきりも錐揉み状に勢い良く吹き飛び、木を薙ぎ倒しながら倒れる。

やはり脚力も問題ない。

次に試すモノは防御力といった所か……。

『奴』が二度立ち上がり、フラフラになりながらもこちらを睨んでくる。

今の一撃で数本程歯が折れたようだ。これくらいならまだ十分試せるな。

『奴』が馬鹿の一つ覚えのような突撃をまた始める。まあ、今の俺には好都合な訳だが……。

『奴』に噛みやすいように俺の左腕を前方に突き出す。

無くなったらそれまでだと思っていたが、不思議と次に映る光景が想像できた。

次の瞬間『奴』が突き出された左腕に噛み付いた。

だが、俺の腕が噛み千切られる事はやはりなかった。

『奴』の鋭い歯が俺の腕に突き刺さる事も、わずかに血が流れる事もなかった。

ただ、腕に歯を突き立てた状態で止まっていた。

この感触としては、そうだな……俺のかつての姿で、ウニに触れたような感覚だ。

要するに、文字通り『蚊が刺した程にも感じない』と云った所だ。

さて、これで今の俺の『力』が大体分かった。

後は……牙を突き立てても俺を決して喰う事が出来ない、この哀れな肉食恐竜に引導を渡してやるだけだ。

そう思った俺は右腕を挙げる。

『奴』は俺が何をしようとしているのか、予測がつかないようだ。

「……終わりだ」

その言葉と共に俺は腕を『奴』の側頭部に叩きつける。

『奴』の首はまるで、花を摘み取るように簡単にもぎ取れた。

首を失った『奴』の胴体が血を大量に噴き出しながら音を立てて崩れ落ちた。

俺は刈り取った頭部を転がった胴体の上に放り捨てた。

俺は暫くの間、その亡骸を眺めていたが、やがて腹が減っていた事に気が付き仕方なく、それを喰らう事にした。

弱肉強食。

それこそが、いつの時代も変わらぬ摂理。

それに従い、俺は肉食恐竜の屍肉しにくを喰らった。

”今”の俺の『力』の確認と腹拵えを終え、”これから”どうするかを考えた。

”これから”とは、この先の未来の自分の在り方の事だ。

今、俺は再び孤独の中にある。

それは運命の分かれ道であり、生き方の選択の機会を得たという事だ。

俺は考える。

このまま独りで過ごすか、それともいずれ現れるであろう『誰か』と添い遂げるか……。

だが、この俺に、多くの命を奪い、大切な者を護れなかった俺に”家族”を持つ資格はない。

ならば、”余生”を孤独に過ごす事が俺への罰だ。

.....。

さて、未来の事はひとまず置いて、当面の生活をする為の『ねぐら』を捜すか。

そう思った俺は『ねぐら』となりそうな洞窟を捜しに森の中へ入っていった。

1・目覚めた先は……（後書き）

一話目にして、いきなりの残酷描写。

流石、ゴジラさん。半端ないです。

取り敢えず、彼の犠牲になった恐竜に冥福を祈ります。

2. ”妖怪”という名の『化け物』(前書き)

皆さん、あけましておめでとうございます！

今回のテーマは、サブタイトル通り、『妖怪との初遭遇と戦闘』と

『闘いにおける弱点の克服』です。

それでは、本編どうぞ！

2. “妖怪”という名の『化け物』

哀しき黒き龍が、この世界に来てから丸一年が経過していた。

この日、彼はある『化け物』の存在を知る……。

『妖怪』という名のかつての自分とはまた異なる『化け物』の存在を……。

《ゴジラ 視点》

俺が、この姿になってから既に三六五日、『ニンゲン』風に言えば一年が経過していた。

あれから何をしていたのかと云うと、食料調達（恐竜の肉や美味しく食べられる草捜し）以外は総て『この姿』で新たに何が出来るのかを模索していた。

もちろん初日に見つけた『ねぐら』となる洞窟の中で、だ。

そして、何が出来るようになっていたか、というと……。

「まさか、俺の長年の弱点が解消出来るようになっていたとはな…

…」

俺は腕を組み、あぐらをかいて浮きながらそう呟いた。

そう。これで分かってもらえる通り、『力』を使ってみたら今まで飛ぶ事が出来なかった俺が、このように飛べるようになっていたのだ。

と言つても、まだお粗末な空中浮遊程度だ。
それでも、ここまで出来るようになるのにかなり苦労したがな……。
改良の余地がまだまだある。

……飛べるようになったから少し気分が高揚しているんだろうか？
いい年をして情けないな……。

暫く浮いていた俺だが、地面に着地する。

理由は簡単だ。

腹が減つたから食料エサの調達に行く為だ。

俺はあぐらを解いて立ち上がり、洞窟ほくの外に出た。

食料を求めて森の中を歩く。歩きながら今日は何を喰おうかと考える。

昨日は襲ってきた肉食恐竜を返り討ちにしてソイツの肉を喰つたし
な……一昨日は偶然見つけた山菜を喰つた……。

さて、どうするか……。

……。

よし。今日は魚でも喰うとしよう。

何事も偏食は良くないからな。

そう決めた俺は、この姿になって最初に行った湖（前回参照）を
目指し、歩を進めた。

《???? 視点》

今日オレハ獲物ヲ捜シテイタ。
ソレモ恐竜ヤ最近突然現レ群レナケレバ何モ出来ナイ猿共、ソシテ、
チツポケナ獣ナンカジャナイ。

トビツキリノ獲物。

ソウ。オレト同ジヨウナ存在。

『妖怪』ヲ……。

俺達『妖怪』ハ『妖怪』ヲ喰ウト『力』ガ増大スル。

腹ハ膨レルシ、『力』ガ増スシー石ニ鳥ナノダ。

ソレニ、『妖怪』ハナカナ力死ナナイカラ、狩リ甲斐ガアツテ実ニ
最高ノ獲物ナノダ。

暫ク捜シテイルト遂ニ見ツケタ。

ソイツハ何故カ、アノ猿共ト同ジヨウナ姿ヲシテイタガ、マア良イ。
他ノ妖怪達トハ違ッテ苦モナク喰エソウナ上ニ美味ソウダ。

ククク……オレニ見ツカッタ不運ヲ呪ウガ良イ。

しかし、この存在は知らなかった。

見つけた獲物・『彼』が決して手を出してはいけない存在である事
を……。

”理不尽”な『敵意』を持って手を出せば、その者に必ずや絶望と滅びを齎す存在である事を……。

《ゴジラ 視点》

現在、俺は湖に向かって歩いてる。
もちろん今日の食料となる魚を捕獲する為だ。

そんな中、俺はふと気付いた。

木々の陰から、こちらを窺う気配を、俺を喰おうとして虎視眈々と隙を窺っている気配を。

そいつの気配はどことなく”今”の俺に似ていた。

つまり、いつも俺を狙う肉食恐竜ではないという事だ。

俺は足を止め、その気配の主の出方を待つ。

そして、それは突然現れた。

木々の間から抜けるように素早く、熟練のハンターのような動きをした影が。

俺は『奴』が動き出した瞬間に後方へ飛び退く。

すると、予測通り俺が先程までいた場所に『奴』の鋭い爪が突き刺さった。

『奴』は恐竜と『ニンゲン』を足したような外見（恐竜：ニンゲン
117:3）に”今”の俺より二回り程大きな巨体をしていた。

まるで、突然変異によって生まれてきたような感じだ。
そして、『奴』の気配はどことなく”今”の俺に似ていた。

『奴』はゆっくりとこちらを振り向き口を開く。

「クハハッ！ヨク避ケタナ、ヤツパリ狩リハコウデナクチャ面白ク
ナイ！」

「…………お前は何者だ？」

俺は素直に疑問を口にする。

すると、『奴』は口を大きく開けて笑いながら答える。

「コレハ傑作ダ！オレガ何者ナノカ分カラナイトハナア！オレハオ
前ト同ジダ同類！！！」

「同類？」

『奴』はいやらしく笑いながら俺の疑問に答える。

「ソウサ！オレハオ前ト同ジ『妖怪』ヨ！！！」

『ヨウカイ』？

それは初めて聞く名前だ。

俺は、”かつての姿”の時は『ニンゲン』から『カイジユウ』など
と呼ばれていたが、それと同義のモノか？

おそらくはそうだろう。

「で？その同類が俺に何の用だ。まあ、大体予想はつくがな」

「ククッ！話ガ早クテ助カル！ソウヨ、オレハオ前ヲ喰イ殺シニ来
タノヨ！！！」

そう言うと『奴』は鋭い爪と強い殺気を俺に向けながら飛びかっ
てきた。

その速度は、『ヨウカイ』という化け物というだけあってか、はっ
きり言っただけの肉食恐竜よりも素早いモノがあった。

「モラッターー！！！」

だが、それでも俺から見れば”遅い”。

俺はその爪の一撃を紙一重でかわす。

すると、近くにあった木が、まるで豆腐？を切るかのように容易に切り裂いていった。

ズズウンツ！という木が倒れる重い音が響く。

思ったよりもなかなかの威力だ。

この身が恐竜のままなら多少なりの傷と痛みを与える事が出来ただろう。

「ナツ！？」

かわされた事に少し『奴』は驚いたようだが、またその素早い動きで向かってきた。

しかも、今度は一撃ではなく、連撃だ。

どうやら二度もかわされた為、攻撃方法を切り替えたのだろう。

だが、『奴』の攻撃は総て俺の体のどこにもかすりしなかった。

「チイツ！チヨコマカト動クヤツダ！！」

『奴』が苛立ちの言葉を吐く。

まあ、これだけやっても避けられれば、誰だってそう思うだろう。

俺も『モスラ』や『バトラ』、『ラドン』と戦^やり合った時もそう思ったモノだ。

”今”となつては懐かしい事だがな。

と、不意に『奴』の動きが止まった。

そして、肩を震わせて笑い始めた。
様子の変化に訝しんでいると、

「ククク！面白い。連撃デモ全ク効果ガナイノハクシ振りダゾ！マ
サカ才前相手ニ、コノ奥ノ手ヲ使ウ事ニナルトハ思イモシナカツタ
ワ！！」

そう叫ぶやいなや、『奴』の右腕が急に”捻り上がった”。

「喰ラエ！」

掛け声と共にその”捻り上がった”腕を俺に向け、突き出す。
それも”その腕”を回転させながらだ。

それにより、攻撃の速さも飛躍的に上がった。
速さも力も申し分ないだろう。

だが、俺を捉えるのにはまだ足りなかった。

俺はその攻撃を紙一重でかわす。

すると、背後にあった大岩が音を立てて跡形もなく碎かれ、岩があ
った場所にはクレーターが出来上がった。

「クハハツ！ドウダオレノ奥ノ手ハ！凄マジイ威力ダロウ！」

『奴』は俺に向かって、誇るように言う。

「……………」

「ククツ！恐怖ノ余リ、声モ出ンカ！」

『奴』は俺の無言をそのように感じたようだが、そうではない。
現に俺は、それ以上の掘削方法をよく知っている。

今や良き思い出だが、かつて俺と共に『闇の俺』と闘った機動兵器
(確か『モゲラ』と呼ばれていたな)がこれを遙かに上回る攻撃方
法をした事がある。

威力こそ違うが、原理は似たようなモノだろう。

「冥土ノ土産ニ、良イ事ヲ教エテヤロウ。オレハコノ技デ、多クノ獲物ノ体ニ風穴ヲ開ケテ仕留メテキタノダ！」

「……………」
俺は、さも嬉しそうに、そして高らかにそう自慢する『奴』を無言で眺めた。

『奴』はその雰囲気通り、そうやって数多くの命を殺して、自身の糧としてきたのだろう。

そして、言葉と雰囲気から察するに、こいつは自分と互角以上に闘える者や自分より強い者と闘った事がない、と確信できる。

自分がこの世で一番強いという錯覚をしているのかもしれない。

「ククク……。恨ムナヨ。恨ムナラ、コノオレニ出会ッタ自分ノ不運ヲ恨ムンダナ！……サア、コノオレニ恐怖ニ引キツツタ顔ヲ見セナガラ死ンデイケエ！！」

そう死刑宣告を叫びながら、『奴』は先程の技を発動させて向かってきた。

その言葉通り、『奴』は、獲物が恐怖に彩られた表情をしたまま死んでいくのを面白がっている。

そんな『奴』を見ていて反吐が出る。

俺とてかつては自らの復讐の為、多くの破壊と殺戮を繰り返してきた。

だが、俺は決して自分が行ってきたそれらの事を楽しんで行った事は一度もない。ただの一度もだ。

そんな俺に比べ、『奴』は真正銘の外道だ。

ならば、外道には外道らしい最期をくれてやるう。

貴様は俺を殺す気で来たのだ。殺されても文句は言えまい。

そう考えた俺は今度は、そこから”一歩も動かなかった”。

『奴』は俺が恐怖で動けないとでも思っているのだろう。そんなニヤけた面構えをしている。

だが、実際は違う。

技の詳細と威力の程を知った今、”避ける必要もない”のだ。

『奴』の攻撃が俺の胸に直撃する。

その瞬間、『奴』は目の前にいる獲物を仕留めた事を確信するような表情を浮かべる。

おそらく『奴』の頭の中には、胸に風穴を開け、絶命し地に倒れ伏している姿が想像されている事だろう。

だが、実際は”当たった”だけだった。

「ナツ、何イツ!？」

漸く現実に戻ってきた『奴』の驚愕の声が聞こえる。

「グッ!コ、コノ……!!」

『奴』は必死になって、自分の捻り上がった腕を回転させて俺の胸を抉ろうと渾身の力を込め叩きつけてくる。

だが、ビクともしない。
当然だ。

この程度の攻撃で俺が傷付き倒れていたのなら、1954年のあの水爆実験で生き残ってはいなかったろう。

それから、『奴』は何度も同じ事を繰り返す。

しかし、その攻撃はとうとう俺の胸を抉る事はなかった。

『奴』が俺の胸を突きながら息切れをし始めた。

そろそろ頃合か、と思った俺は今まで無言を貫いていた口を漸く開く。

「どうした。回転^{まわ}るんじゃないのか？なんなら俺が手伝ってやる。」

「!?!」

驚く『奴』の捻り上がった腕を俺は自分の左手で掴む。

「ナツ、何ヲ!?!」

そんな声に構わず、俺はその腕を指先だけで”回し始める”。

バキベキゴキグキパキペキグシャ!!

そんな鈍い音が森の中に響き渡った。

それは『奴』の骨が砕けていく音。

「グッ、グゲギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

『奴』の激痛に苦しむ声もまた辺りに響く。

その声は、まるで断末魔の叫びだ。

地面に倒れ、あまりの激痛にのた打ち回る『奴』。

だが、それをジィッと見つめる俺ではない。

生憎、俺にそれを見て楽しむという感性はない。

『敵意』を持って襲いかかって来た者には容赦しない。

それが外道なら尚更だ。

俺はのた打ち回る『奴』に向けて足を運んだ。

《三人称 視点》

右腕を完膚無きまでに破壊された恐竜系の妖怪（以降、妖怪）は治まる事のない激痛にのた打ち回っていた。

捻りに捻曲がった右腕を押さえる妖怪。その前に、黒い影が立つ。

ゴジラだ。

姿が変わっても尚、彼から発せられる覇気は衰える事はない。寧ろ増大していた。

「ギッ!!」

妖怪がゴジラを睨みつけ、左腕も捻らせ先程通用しなかった技を放とうとする。

だが、

「ふっ!!」

技が放たれる前に、妖怪の顔面にゴジラの強烈な力と速度を備えた拳が突き刺さる。

「グペエッ!!」

そんな声を上げながら、妖怪は勢い良く直線に吹き飛ぶ。

地面に幾度も叩き付けられる事、数回。

漸く止まった頃には、妖怪とゴジラの距離はかなり離れていた。

「ギ……グッ!？」

妖怪が身を起こしゴジラの方を見た時には既にその場にはいなかった。

どこへ行ったのか、と彼は辺りを見回す。

「……こつちだ」

不意に背後からゴジラの声が聞こえた。
後ろを振り返った瞬間――。

「ゲプウエツ！！」

ゴジラのこれまた強烈な右回し蹴りが彼の側頭部に命中する。

今度は、錐揉み状に回転しながら吹き飛ばされ、先程と同じように地面に叩き付けられ、皮膚を擦らせて止まる。

フラフラしながらも何とか立ち上がる妖怪。

だが、その顔は驚愕に染まっていた。

（ナ、何故ダ！？タツタニ発打撃ヲ受ケタダケデ何故コレホドノ痛手ヲオレガ負ウンダ！？ソレモ脆弱ナ猿共ト同ジヨウナ拳デ！？）

妖怪がそう思いながら前方を見れば、彼を蹴り飛ばしたゴジラが一步一歩ゆっくりとだが確実に迫ってくる。

そして妖怪は何が何だか理解できなかった。

先程自分の攻撃が通用しなかった理由も理解できなかった。

妖怪はその理解できない事に恐怖を抱いていた。

人間は、未知のモノに恐怖を抱き、排除しようとするが、それは妖怪にも当てはまるのかもしれない。

（コ、コウナツタラ、コイツヲ『アレ』デ、消シ飛バスシカナイ！
肉ハ残念ダガ、今ハ生キ残ル事ノ方ガ先決ダ！）

それ故、当初の目的――ゴジラを殺してその屍肉を喰う事を忘れ、妖怪は最近編み出した”もう一つ”の奥の手を使って、目の前の脅

威を跡形もなく葬る事にした。

『もう一つ』の奥の手^{これ}』を使えばどんなモノさえも消し飛ばす事が出来る。

それは編み出した時に、自分で確認している。

しかし、妖怪はその技をなかなか放とうとはしない。

何故なら、

(『アレ』ヲ确实ニ当テルニ至近距離ジヤナキヤ駄目ダ！距離ガ離レテイルト避ケラレル可能性ガアル！イヤ、确实ニ避ケラレル！)

そう。彼が危惧する理由はそれだ。

現にこの妖怪はゴジラの体の動きが全く見えなかった。

そして、その攻撃時の速さも……。

だから、妖怪はその自信たっぷりの一撃を当てる為、いやらしい顔を浮かべながら虎視眈々と待ち構える。

その先に待つ、真の絶望を知りもしないで……。

《ゴジラ 視点》

俺は恐竜の特徴を備えた『ヨウカイ』とやらにトドメを刺す為、『奴』が吹き飛んでいった場所を目指して歩いている。

そして、『奴』の姿が見えてきた所で、俺は素直に驚いた。

何故なら、『奴』は深手を負っているものの、まだ比較的元気だったからだ。

『奴』には、いつも襲ってくる肉食恐竜よりも、少しばかり力を加えた打撃を二発叩き込んだつもりだったのだが、それでも『奴』はフラフラになりながらも己の足で地面をしっかりと踏みしめて立っている。

その生命力とタフさには脱帽してしまふ。

だが、”それだけ”だ。

「なかなか頑丈だな。だが、もう耐える必要はない。そろそろ、その息の根を止めさせてもらおう」

俺が死刑宣告をするが、『奴』はニヤついた顔のまま無言でそれを聞いていた。

その目はまるで、罨にかかった獲物を見て喜んでいる狩人のような目だった。

俺がその態度に疑問に思っていると、

「ギヒヒツ！確力ニオレノ死ハ免レンダロウ。ダガ、ソレハ”コノ

ママデハ”トイウ話ダ！」

「？」

俺は『奴』の言葉にふと疑問に思う。

こいつの奥の手は、既に完膚無きまでに破壊してある。

それだと言うのに、『奴』は余裕の表情をしている。

どういう事だ、と内心考えていると……。

「知りタイカ？ナラ教エテヤル！コレガソノ”答エ”ダー……！」
そう叫びながら『奴』は開いた左手を突き出す。

瞬間。

ゴバツ！！という音と共に赤い光の奔流が俺を飲み込んだ。

《???? 改め 恐竜の妖怪 視点》

ヤッタ！

ソウ、オレハ確信シタ。

オレノ渾身ノ『妖力波』が見事、『奴』二命中シタノダ。

オレノコノ”モウ一ツ”ニシテ最後ノ奥ノ手、『妖力波』ハ、体内ノ妖力ヲ掌ニ凝縮シテ一気ニ放出サセル技ダ。

ソノ威力ハ、巨大ナ大岩ヲモ粉碎スル。

正ニ一撃必殺ノ技ナノダ。

一 緒ニ吹き飛ばシテシマッタ土ノ埃ほこりデ、奴ノ様子が見エナイガ、オソラク肉片一ツ残サズニ消シ飛ンデイル事ダロウ。

暫クシテ、土煙ガ晴レテキタ。

オレハ、ナイデアロウガ一応奴ノ死体ヲ確認スル為、身ヲ乗り出す。

何ダカ様子ガ変ダ。

消シ飛ンダハズノ奴ノ影が見エル。

ソウ思ツタ時、オレハ目ヲ思ワズ見開イタ。

何故ナラ、土煙ガ晴レタ時、ソコニハ何事モナカッタカノヨウニ傷一ツ作ラナイデ佇ム奴ノ姿ガ、俺ヲ感情ノナイ顔デ見ツメル奴ノ姿ガ現レタノダカラ。

「……………」
表情ヲ変エル事モナク無言デ、オレヲ鋭イ目デ見ツメル『奴』。
ソコニハオレガ見た事ノナイ『何力』ガアツタ。
ソノ『何力』ガ分カラナイ為、

「バ、馬鹿ナ……！？オレノ『妖力波』ハ確カニオ前ヲ捉エタハズ
……………！ソレナノニ何デ何事モナカッタカノヨウニ立ツテイルンダ！」
オレハ思ワズ、ソウ呟イテイタ。
ソレ程ノ衝撃ダツタノダ。

「『ヨウリヨクハ』か……。なかなか良い技だった」

ソノ叫ビヲ聞イテ、『奴』ハソウ答エタ。
感心シタカノヨウニ。
シカシ、肝心ノ質問ニハ答エテイナカッタ。

「だが、これぐらいの攻撃は以前何度も受けた事がある。残念だったな」

ソノ一言デオレハ思ワズ震エタ。
コノ震エハ間違イナク恐怖カラ来ルモノ。
ソレニ『奴』ハ何ト言ツタ？

『コレグライノ攻撃ハ以前何度も受ケタ事ガアル』
ソレヲ復唱シタオレハ生マレテ初メテノ恐怖ヲ味ワツテイタ。
ソノ証拠ニ全身カラ脂汗ガ大量ニ噴キ出シテイタ。
ソシテ、同時ニ、コンナ化ケ物ヲ狩ロウトシタ事ヲ後悔シタ。

「さて、そろそろ処刑の時間だ」

『奴』ガ右手ノ指ヲパキパキ鳴ラシナガラ呟ク。
ソレト同時ニ『奴』カラ強大ナ妖力が溢レ出ル。

「ヒイツ!？」

ソノ強大ナ妖力ニ恐レロナシタ、オレハ情ケナイ声ヲ上ゲテ飛ビ立ツタ。

出来ルダケ遠クニ逃ゲナケレバ、殺サレル!

オレハ、ソノ想イダケデ空ヲ飛ンダ。

全速力デ、ダ。

ダガ、ココデ幸イダッタノハ『奴』ガ、マダ飛ベナイトイウ事ダ。
ソウ。コノ時ハ、本当ニソウ思ツテイタ。

イクラカ離レタ所デ、様子ヲ確認スル為、オレハ後口ヲ振り返ル。
イヤ、正確ニ八地上ニイル『奴』ヲ見下ロス。
ダガ、直後ニオレハ動キヲ空中デ止メテシマウ。

マルデ、金縛リニ合ツタカノヨウニ。

ソシテ恐怖ノ余リ、涙ヲ流シナガラ息ヲ吞ンダ。

何故ナラ、

地上ニイタ『奴』ノ背後ニ影ガ見エタノダ。

ソレモ、タダノ影デハナク、山ノヨウニ巨大デ黒イ真正銘ノ『化
ケ物』ノ影ガ……。

《ゴジラ 視点》

右手の指の骨を鳴らしながら、俺は『奴』に静かに宣言する。

「さて、そろそろ処刑の時間だ」

言いながら、俺は体内に眠っている『力』を解放する。

「ヒイツ!？」

俺の解放した『力』に恐れをなしたのか『奴』は情けない声を上げながら空へ飛んで逃げていった。

空を飛んで逃げたか……。この状況では賢明な判断だ。

『奴』は『ヨウリヨク』とか云うものを使って空を飛んだ。

だとすると、”今”の俺が『ヨウカイ』というのは正しいようだ。

何故なら、『質』こそ違うが、俺の中にある妙な『力』も似たようなモノだからだ。

もしかしたら、『奴』のように空を飛べるようになれるかもしれない。

だが、俺はまだ空を自由自在に飛べない。

だから、追い掛ける事は実質不可能だ。

では、どうするべきか。

簡単だ。『アレ』を使えば良い。

『アレ』なら遠距離にいる敵にも攻撃を当てられる。だが、これには欠点、いや弱点がある。

それは口からでしか放てないという事だ。

”かつて”の姿ならば、その巨体だった故に全く問題にはしていな

かった。

だが、今は身長は高いとはいえ、『ニンゲン』の姿だ。こんな時代だ（白亜紀頃）。

危険は何も地上だけではない。

この姿では、万が一真上から攻撃された場合、口から発射していたら伏兵が近くにいた時、対処が遅れ命取りになってしまう。

一応、『体内放射』という技があるが、威力は『アレ』より遥かに落ちる。

『体内放射』はあくまでも緊急脱出用の技だ。

『アレ』の弱点及び欠点を解消する為にはどうするべきか……。答えは、『奴』との闘いにあった。

『奴』が最後に放った『ヨウリヨクハ』という、あの技はどこことなく『アレ』に似ている。

観察して分かった事だが、『ヨウリヨクハ』とやらは、体内の『力』を掌に一気に凝縮して一気に放つというモノのようだ。

なら、『ヨウカイ』とやらになったこの身なら、それは不可能ではない。

空を飛ぶ事より、『アレ』を放つ事は今まで行ってきた事なのでおそらく容易に出来るはずだ。

そう思った俺は早速試してみる事にした。

体内の『核』の力を集中して右掌に凝縮させる。

体が青白く光り出し稲妻が迸る。

それが消えると右掌が、薄く発光する。

よし。十分出来る。

俺は、右掌に凝縮させた『核』の力を霧散させた。そして、上空にいるであろう『奴』をこの目で捉える。

「ナツ、ナツ、何ナンダオ前ハ！ソノ強大スギル妖力トソノ」本性
「ハ一体何ナンダ！？ソナ妖怪、見タ事モ聞イタ事モナイ！！」

何故か『奴』が滞空して怯えながら叫んでいるが、俺には同情の心などもちろんなかった。

外道の泣き叫ぶ姿など見苦しいだけだ。

「俺が何者だろうと貴様にはもう関係ない」

「！？」

俺は静かに言う。

「貴様はここで死ぬ。今この場で俺の手でな……」

「ナツ、何故ダ！？モウオレハアンタニ負ケテ逃げ出シタ惨メナ『妖怪』ダ！逃ゲル者ハ見逃スノガ普通デハナイノカ！？」

『奴』の顔が絶望の色に染めあがり回りくどい命乞いをしてくる。

「貴様は俺に手を出した。己が”狩り”を楽しみたいとかいう身勝手な理由でな……。そんな奴を生かしてやる程、俺は甘くない」

「ナツ！？」

「それに貴様はそうやって逃げた者を生かしてやったのか？違うだろう」

「……………」

『奴』は俺の言葉に何も言えなくなる。

どうやら凶星だったようだ。

「……だが、貴様は俺に『ヨウリヨクハ』という良いモノを見せてくれた……。その礼に見せてやる」

「ナツ、何ヲ!?」

『奴』が怯えながら訊く。

それと同時に俺の体が青白く発光して、全身に稲妻が迸り右掌に『核』の力』が凝縮される。

「総てを焼き尽くす、滅びの光だ……!」

その言葉と共に俺は、右掌を『奴』に向け、『アレ』を放つ。青白く太い閃光が空を焼きながら『奴』に真っ直ぐ突き進む。

「ウツ、ウツ、ウワアアアアアアアアアア!」

それを見た『奴』は泣きながら、そこから逃げ出す。だが、

「タツ、助け……アツ、アツ、アアギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!」

『奴』はその断末魔と共に蒸発して、この世から”完全に”消滅した。

俺は暫く『奴』が”存在していた”空を眺めていたが、やがて当初

の目的を思い出し、踵を返した。

俺は歩きながら、『ヨウカイ』について考える。

俺の記憶では、あのような存在は、この時代にはいなかった。
という事は異世界という可能性もある。

平穩に暮らせると思っていたのだが、あのような存在がいるとなると、なかなかそういう訳にはいかないらしい。

その後、俺は次に『ヨウカイ』という化け物に会ったらどのような対処すべきか、と考えながら湖へと向かった。

2. ”妖怪” という名の『化け物』（後書き）

遂に『放射熱線』（人によっては『放射能火炎』の呼称も）作者の妄想により炸裂！！

本当に申し訳ありません。

格好良さの追求と私の東方イメージ（掌から弾幕発射）で書いてたら、こうなってしまうました。

真に申し訳ありません！

さて、気を取り直して次回予告のようなモノを。

次回は、時が飛んでいよいよ原作キャラとの出逢いを書きたいと思
います。

それでは、また！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8538z/>

東方怪獣王

2012年1月2日09時47分発行